

## 新刊紹介

斎藤正二著

# 『斎藤正二著作選集 4 日本の自然観の研究Ⅳ——変容と終焉』

(八坂書房、2006年)

伊藤 貴雄

本書は、2001(平成13)年から刊行され始めた『斎藤正二著作選集』全7巻の最終配本であり、同時に、著者のライフワークである《日本の自然観の研究》シリーズの完結篇に当たる。同著作選集の第7巻(『教育史・教育思想の研究』、2004年)については、すでに本誌『創価教育研究』第3号において評者が紹介をしている。そこでは、著者の思想史研究およびその一部をなす牧口常三郎研究に関して(とくに方法論の面から)簡単な概観を与えておいたので、本稿とあわせて参照していただければ幸いである<sup>(1)</sup>。

なお、著作選集全巻の刊行意義については、版元の八坂書房が発刊に際して、「昨今、心ある人びとからは知の無力・衰退が嘆かれ、世上には思考の保守・右傾化の様相も見え隠れしているとき、知への飽く無き追求のもとに日本文化の深奥を探求しつづけ、真摯直截なる論述で多くの識者に感銘を与え、怠惰な日本人の心に覚醒の警鐘を鳴らしつづける斎藤博士の諸著作を収録刊行することは時宜を得たものと確信する」、「『やまとだまし』(大和魂)という言葉に象徴されるような、所謂日本伝統イデオロギーの構造に対して鋭いメスを入れてその本質を根本から問い質す分析を行い、またサクラ(桜)に代表されるような日本人独自の具体的な自然観の形成について、思想・歴史・宗教・芸能・科学などの文献も広く渉猟して博覧強記の考証はつとに知られる所である。これらを総合しての博士の日本における自然史観の歴史と思想的背景の研究は、まさに前人未踏の金字塔といえるだろう。[……]二十世紀後半世紀における日本文化を論じたもつとも重要な人物としての斎藤博士の著作選集をここに送る」<sup>(2)</sup>と記している。評者もまた、同じ理

---

<sup>(1)</sup> 『創価教育研究』第3号、2004年、233-238ページ。なお、本稿においても、引用文中の下線および[ ]内の挿入は評者によるものである。

<sup>(2)</sup> 八坂書房「刊行のことば」、2001年。ちなみに、著作選集全7巻の構成は以下の通りである。

- 第1巻：日本の自然観の研究Ⅰ——形成と定着
- 第2巻：日本の自然観の研究Ⅱ——展開の諸相
- 第3巻：日本の自然観の研究Ⅲ——変化の過程
- 第4巻：日本の自然観の研究Ⅳ——変容と終焉

由でこの選集の発刊を喜ぶ一人である。

\*

さて、本書は、著者の学位論文でもある『日本の自然観の研究』（八坂書房、1978年、著作選集第1・2巻所収）、およびその続編『日本の自然観の変化過程』（東京電気大学出版局、1989年、著作選集第3巻所収）につづく内容になっている。主に古代・中世日本の自然思想を扱った上記2著作と比べると、『変容と終焉』というサブタイトルにも現れているように、近代日本の自然思想の分析により多くの重点を置いている。目次を以下に掲げておく。

第一部 自然観、世界観、そして日本の自然観

自然観、世界観、そして日本の自然観（その一）

自然観、世界観、そして日本の自然観（その二）

自然観、世界観、そして日本の自然観（その三）

第二部 古代日本人の文化生活

古代日本国家の形成と学校の成立

古代日本児童文化史序説

第三部 日本の自然観の形成と変容

桜の見方の三類型——民族学者たちの研究を準りながら

菊と日本人

雪舟等楊の「中国の旅」再考——日本水墨画の教育文化史的検証

第四部 近代知識人の自然理解

正岡子規「写生説」の精神的基盤

牧口常三郎の教育思想家像——ラディカリズムと普遍的「知」の追求と

若き牧口常三郎と現代——『人生地理学』研究の最前線から

山村暮鳥童話『鉄の靴』の神話的思考

——詩人山村暮鳥における《自然》《人類的なもの》

第五部 「二育paradigm」と「三育Ideologie」との間——明治思想史の一断面

「二育paradigm」と「三育Ideologie」との間（その一）

「二育paradigm」と「三育Ideologie」との間（その二）

「二育paradigm」と「三育Ideologie」との間（その三）

「二育paradigm」と「三育Ideologie」との間（その四）

巻末私記に従って概観すると、第一部は「第二次世界大戦後も依然として“日本人は世界でい

---

第5巻：日本人とサクラ・花の思想史

第6巻：「やまとだまし」の文化史・日本教育文化史序論・日本人と動物

第7巻：教育史・教育思想の研究

ちばん自然を愛する国民である”という思い込みを鞏固に護持している人士が圧倒的に多数存在しているので、左様な人たちにむかい、だいたい日本人自然酷愛説は明治ナショナリズムごろに造出されて昭和軍国主義最高高揚期に普及徹底を見るに到ったものでしかない、という思想史のプロセスを論証＝提示した文章」<sup>(3)</sup>であり、第二部・第三部は「日本思想・日本宗教・日本芸術の独自性を主張するよりも以前に、われらの先輩たちが抑抑（そもそも）の本質＝本籍たる中国や朝鮮半島や東南アジアの文明を出来る限り忠実に学習＝模倣しつつ長時間を費やして日本独自の固有文化を案出すべく漸次的＝段階的成功を積み上げていった健気かつ真摯なる努力辛酸の足跡を歪曲なしに評価せよと説く」<sup>(4)</sup>。そして第四部・第五部は、「明治の開明派インテリが国家指導層の誘導とは別に、むしろ個人的関心の趨くがままその持つ方向量（ベクトル）に随き従いながら極めて自由大胆な自然認識＝世界認識の仕方を発揮してみせた客観的社会事実を跡づけた文章群である。正岡子規も山村暮鳥も日本美叙情を遙かに超えて人類的思考の普遍性を獲得すべく目指していた。牧口常三郎に到っては最初から西欧的認識論の世界の習得をめざし、晩年にはカント哲学と仏法世界とを包摂する価値論世界に到達しさえした」<sup>(5)</sup>。——いずれも知的刺激に満ちた渾身の論考であり、全篇に詳細に言及したいとの思いに駆られるが、(本誌の性格に鑑み) 評者としては、本書の最終帰結部（それはそのまま《日本の自然観の研究》シリーズの最終帰結部ということになる）に牧口常三郎論が置かれているという事実を特筆しておきたい。

\*

本書は本文総計610ページの大冊だが、このうち第四部の2つの章（「牧口常三郎の教育思想家像——ラディカリズムと普遍的「知」の追求と」「若き牧口常三郎と現代——『人生地理学』研究の最前線から」）と、第五部全体（「二育paradigm」と「三育Ideologie」との間——明治思想史の一断面〔その一～その四〕）との、合計204ページ（すなわち本書全体の約3分の1の分量）が、牧口常三郎研究に関わる内容となっている。“日本の自然観の研究”の一環としてこれだけ多く牧口常三郎論が組み込まれていることの理由と意義については後述するとして、まず各論考の中身をごく簡単に紹介＝概観しておこう。

①「牧口常三郎の教育思想家像——ラディカリズムと普遍的「知」の追求と」は、「国家や管理社会が押し付ける国家優先主義や画一思考方式に屈服せず、個人として独立的精神を燃やしつづけ得る“強い人間”であるラディカリスト、すなわち、「現状批判を徹底的に行うために世俗的富や名声など歯牙にもかけない寡欲＝清廉なる個人」としての牧口常三郎に光を当てる。牧口は生涯に最小限3回ほど“立身出世”の機会に恵まれた（1つ目に北海道での少年時代に薩摩派官僚の小樽警察署長に目をかけられたこと、2つ目に北海道師範学校教諭兼付属小学校長というポストを得たこと、3つ目に『人生地理学』発刊後に柳田国男や新渡戸稲造らの「郷土会」の一員となったこと）にもかかわらず、それら栄達の機会を敢えて「蹴飛ばし」て、貧しい者・恵まれ

<sup>(3)</sup> 『斎藤正二著作選集第4巻』八坂書房、2006年、612ページ。

<sup>(4)</sup> 同上、612-613ページ。

<sup>(5)</sup> 同上、613ページ。

ぬ者・弱き者の側に立って行動したのである。斎藤は結論する。「本当の教育理論は、中央権力に座して命令を発する人間からは生まれない。権力からいけば遠い周縁部にて“臍曲がり”の漂流的発想をつづける自由な魂が、一方で、あくまで普遍的な“知”を掘り下げつつ、まず自分自身を教えようと決断し、つぎに他者＝社会のために役立つと決意するとき、正しい理論は生まれる」<sup>(6)</sup>。

②「若き牧口常三郎と現代——『人生地理学』研究の最前線から」は、牧口の第一著作『人生地理学』がヘルバルト主義教授学理論の枠組みを使って“科学的地理学理論”を築き上げている独自性を論証する。その際、牧口が同書のなかで「権力者固有の専門用語の使用をわざわざ意図して避けている」という事実に注目する。たとえば牧口は、北海道で少年期青年期を過ごし、北海道師範学校に約10年も奉職しながら、北海道行政の象徴である「開拓」という用語をほとんど使わず、代わりに「開明」という用語を全巻にわたり用いている。斎藤は考察する。『『開明』enlightenment; educationと『開拓』reclamation; development; exploitationとは、日本語表現では随分と類似（字面といい、耳からくる語感といい）しているように思えるけれど、おのおのの中身ということになると、それこそ《文明》と《野蛮》との隔たりほどの相違がある。後者すなわち『開拓』（現代では『開発』というふう言い替えているが）のほうがつねに国家権力や巨大企業を離れては存在し得ないのに対して、前者すなわち『開明』のほうは個人の精神に深く関わってのみ存在する。[牧口が「開拓」の語を使用しなかったのは]国家権力が主軸になって推進する『開拓』がいかに不公平や野蛮や非人道をくりひろげるかという政治経済的現実を見抜いてしまったからだ、というふうに要約して差し支えない<sup>(7)</sup>。

③「『二育paradigm』と『三育Ideologie』との間——明治思想史の一断面」は、天皇制道徳教育の吹き荒れた時代にあつて、教育には「知育」と「体育」との二区分法しか存在しないという二育論を唱えた、牧口の第四著作『創価教育学体系』のリベラリズムを評価する。もとは『創価大学教育学部論集』に連載された原稿用紙換算で400枚以上の長大な論考であるが、かつて斎藤自身が作った簡潔な要約があるので引用させて頂く。「こんにち、教育界をはじめとして思想界や現実政治社会で『現代日本は知育が進んだが徳育がおろそかになった』などと盛んに言われている。すなわち『三育』（知・徳・体）が教育区分の“orthodoxy”のように信じられているが、これは天皇制絶対主義の捏造物でしかない」（その一）<sup>(8)</sup>。「牧口常三郎は教育区分には『二育』（体育・知育の二区分法dichotomy）しかなく『三育』（知・徳・体の三分法trichotomy）は虚偽＝不正でしかないと考えた。仔細に検討してゆくと、明治初年の教育学翻訳書では『二育』が普通だったのに、だんだん『三育』が優勢になっていった軌跡を辿り得る。牧口は『二育』を死守し、国家権力の押し付ける『三育』に対抗したのだった」（その二）<sup>(9)</sup>。

さらに、「明治中期以来、教育が『三育』（知・徳・体）に区分されるのは、スペンサー『教育

<sup>(6)</sup> 同上、373ページ。

<sup>(7)</sup> 同上、390ページ。

<sup>(8)</sup> 『研究業績一覧第6集——1988年4月1日～1992年3月31日』創価大学、1992年、130ページ。

<sup>(9)</sup> 同上、131ページ。

論』Spencer, H: *Education* 1860. がそうしているからだ、との論法を用いてきた。しかし、スペンサー原著を細密に分析していくと、スペンサーその人に『三育』区分法の考え方の全く無いことを知らされ、愕然とする」(その三)<sup>(10)</sup>。「明治初期の文明開化潮流にあつては、教育には『知育』『体育』しか無いとの西欧学問の拠って立つ二分法dichotomyが忠実正確に輸入されたにもかかわらず、明治十年代後半から二十年代前半にかけて三分法trichotomyが勝利を占めてゆく。スペンサー『教育論』を故意に曲解(あるいは学力不足による誤解)するか作為的に歪曲するかして、学問=教育の領野に『徳育』を加え、三育をフォルミュラ化してしまうのである。これにより、爾来百年、昭和平成の今日に至るまで、一般国民および青少年は『三育』の呪縛から逃れられなくなってしまう。唯一人、牧口常三郎のみが、この『三育』の虚偽を看破していたのだ」(その四)<sup>(11)</sup>。「スペンサー自身の考え方のなかには『知育』『徳育』『体育』という三分法trichotomyなど毫も提示されていなかったのに、明治日本では『スペンサー先生の所謂三育』式の牽強附会が平然と行なわれ、それが今日にまでも継承されている。本稿では、自由民権時代に刊行された尺振八訳『斯氏教育論』(1880年4月刊)と、内閣制度が確立した時期に刊行された有賀長雄訳『標註斯氏教育論』(1886年11月刊)と、二種類の翻訳書を比較検討する作業をつうじ、どのように国権主義イデオロギーが勝利を博してゆくに至ったかという過程を客観的=科学的に論証する」(その五)<sup>(12)</sup>。

いうまでもなく、この論考が扱っている主題は、“徳は教えられるか”という古来からの哲学的問題の核心に関わっている。多少西洋哲学を学んだことのある人は誰も知っているように、ソクラテスにせよ、デカルトにせよ、カントやショーペンハウアーにせよ、およそ慎重で誠実で合理的な思考の持ち主は“道徳を教える”という発想に対して深い疑念を抱いている。近代日本ではそうした省察作業を無視した結果、必然的に“忠君愛国”イデオロギーが暴威を振る悲劇を招いてしまったが、そのなかにあつて牧口は(スペンサー教育論の真意を正しく理解して)ひとり知的良心を守り続けたのである。

\*

以上が、本書に収録された牧口常三郎論の概略であるが、読者のなかには、牧口教育学と《日本の自然観》との間に一体いかなる関係があるのか、いぶかしく思う方もおられるだろう。そうした方はぜひ、本書に先行する2つの著作——『日本の自然観の研究』とその続編『日本の自然観の変化過程』と——を紐解いていただきたい。両著とも古代以来の日本教育史に多くの紙数を割いているのである。なぜなら、これらの著作で斎藤が解明したことは、日本の伝統的自然観とされるもの(松は君臣関係の道徳を表す、菊は権力者の繁栄長寿を象徴する、等々)のほとんど全てが古代中国から輸入されたものであり、それゆえ中国律令時代の専制思想と不可分のものであるという史的事実であるが、この“専制思想的自然観”を日本で定着させる機能を果たしたの

<sup>(10)</sup> 同上、132ページ。

<sup>(11)</sup> 『研究業績一覧第7集——1992年4月1日～1996年3月31日』創価大学、1996年、114ページ。

<sup>(12)</sup> 同上、115ページ。なお、この連載第5回は、分量の都合上、著作選集には途中までしか収録されていない。

が他ならぬ《教育》だったからである。『日本の自然観の研究』の最終章で齋藤はいう。「日本人は最初からいちども自然を愛するという精神的態度を持たずに過ぎてきたのではないか、その代わりに、一定の自然観を愛しつつ生きてきたのではなかったか、そして、その自然観を後生大事に踏襲し再生産する思考方式＝生活態度を以て自然そのものを愛することと勘違いしてきたのではなかったか、と。さらに問えば、この『自然を愛すること』と『自然観を愛すること』との混同は既成体制の現状維持の目的に適うものとしてむしろ“上からの教育”のシステムのなかで積極的に増幅される部分が多かったのではないか、と。——まず、このように疑問を発してみることを以て、これまで謂われてきた日本人の観念上の自然愛と、こんにち日本列島内外に生起している現実の自然破壊との間の背反を関係的に明かす手がかりになし得ると、そう考えるに到ったのである」<sup>(13)</sup>。

だとすれば、古代からの専制思想的な日本の自然観を（ペスタロッチの直観教授理論やヘルバルトの多方興味説等の科学的思考によって）相対化し得た『人生地理学』の作者が、同じく古代からの権力追隨的な日本の教育観を（ペスタロッチ、ヘルバルトに加えて、スペンサー教育論やデュルケム社会学理論やカント批判哲学の影響のもと）弾劾し得た『創価教育学体系』の作者であることに、なんの不思議があろう。現に、続編『日本の自然観の変化過程』の巻末私記ですでに、齋藤がこう述べているのである。「[同書の第三部は] 日本近代思想史の謂わば“周辺部の地帯”（マージナル・エリア）に場所を占めて発言した知識人たちの、伝統的自然観（因習的な“自然の見かた”と言い替えてもよい）への対処の仕方を跡づけた論文を以て組成する。追尋しているうち、これら偉大な知性たちが、揃いも揃って、“自然の見かた”を《人生の生きかた》と不可分離の思考として把握している人たちである、という重大命題の真ん前に立たされることになった。[……] 北海道師範学校教諭として歪みなく《自然》を観察した眼差しを透して己が青春記念碑たる『人生地理学』を構築し、そのあと、その歪みなき眼差しを磨きつつ急進的教育改革の実践行動に入っていった牧口常三郎も、つねに、中央の陽の当たる場所から遠くに身を置いたがゆえに秀れた業績を残し得た」<sup>(14)</sup>。

——《日本の自然観の研究》シリーズの最終帰結部に、『人生地理学』に関する論考（「若き牧口常三郎と現代」）と『創価教育学体系』に関する論考（「二育paradigm」と「三育Ideologie」との間）とが並んで収録されていることを、われわれとしても、仮初めのこととは思ってはならない。そして、本書所収の論考自体もまた、「自然の見かた」を《人生の生きかた》と不可分離の思考として把握している」人間の筆によるものであることを忘れてはならない。締め括りに、本書巻末私記の末尾の一文を引いておこう。「[哲学者・出陣は戦時中の著作『ギリシアの哲学と政治』のなかで] 最終の境域へゆけば個別学問研究が客観的正しさに到達するか否かといったことよりも、古代ギリシアにことよせて我が日本の明日を気遣うことのほうが大切であると、然く聞

<sup>(13)</sup> 『齋藤正二著作選集第2巻』八坂書房、2002年、565ページ。

<sup>(14)</sup> 齋藤正二『日本の自然観の変化過程』東京電気大学出版局、1989年、852-853ページ。なお、この巻末私記は、著作選集には収録されていない。

明する。当方は、出隆博士とは異なってマルクス主義の信奉者ではないけれど、この学問精神の高潔さに触れて、読み返す毎に涙を落とす。己れの学問は逆も此の境涯には届き難いが、せめて博士の掬みに倣いたいと願う。当方本巻の諸主題も、最終のところへくれば、現代政治思潮に対する気遣い＝懸念Angstに駆られて、ナニカについての語り（レーデ）を言表したかったまでのことに過ぎない<sup>(15)</sup>。——本書を精読することは、現代を省察することと同義なのである。

---

<sup>(15)</sup> 『斎藤正二著作選集第4巻』、614ページ。